ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　部屋に置かれた『アップロード・メタル』の少し上の方に出来た大きな空間の裂け目を通って中に入ると、ジトっとした冷たい冷気が頬を撫でるのを感じた。タブレットにインストールされた地図を頼りに広大な草原を少し進むと、丘が見えてきた。

「いやー、やっぱ、ここら辺の土地感覚は、まだ慣れないねぇ」

「頻繁に行っている訳ではありませんからね。無理もないですよ」

　呑気に話すレイと詠だが、今はそんな事をしている時ではない。視線だけで二人に注意の意を伝えようとした俺だったが、残念ながら二人は気付かなかった。代わりに樹葉が気付いてくれたようで、

「ほら二人共、気を引き締めなきゃ」

　と、俺の代わりに注意してくれたので、全くありがたいことである。

　丘を登って、さらに真っ直ぐ進む。やがて俺達の眼下に見えてきたのは、既に撤退の準備をしている調査員達十数人と、その五百数十メートル向こうからゆっくりと歩いてくる――もう何回見たか分からないが――あの黒いボディーの赤い目をしたロボット達数体だった。さらに、ここからだと遠すぎて薄らとしか分からないが、後ろから大きな灰色の盾を構えた兵士っぽい奴数十人が、ロボットよりかなり後ろを歩いている。

　俺は、ポケットからコンタクトケースを取り出して、中の赤いカラコンを目につけた。

「お、間に合ったっぽいね。んじゃ、私らはマルクスお兄様が来るまで――」

「いいよ別に」

　レイの言葉を、俺は遮る。とうに赤くなった世界の中で、敵の姿はカラコンをつける前よりもはっきりとしていた。

「あんな奴ら、もう何度も戦っているんだ。倒し方なら体に染み付いている。マルクスさんが来る前に、とっとと片付けてしまおうぜ」

「え、ちょ……ちょっと！」

「先に行っているぞ！」

　そう言うが早いか、俺は大地を蹴る。後ろでレイ達が何か言うのが聞こえたが、全く気にならない。なびくマントの音や、吹きつける風。心地よいＢＧＭが耳に響く。

　敵との距離を百数十メートルにまで詰めた俺は、左側の腰に付いている『ヘヴンズ・ギア』を鞘ごと取り外す。柄を持って両手で刀を右側に持ってくるようにひと振りすると、遠心力で鞘が抜けて、白い刀身が姿を現した。戦闘モード、開始。

　そして、俺の中の体内時計が動き出す。一分三十秒。それが俺に与えられた時間だ。

　赤いカラコンを付けた俺は、確かに血が怖くなくなる。でも、それと同時に『カラーセラピー』の効果によって、戦闘モードに入ると、通常では引き出せないはずの身体能力を発揮するのだ。要は、カラコンを付けた俺が戦闘モードに入っている時は、常時『火事場の馬鹿力を発揮している状態』なのである。

当然、その間は体が悲鳴をあげている訳で、長いことカラコンを付けた状態で戦闘モードに入っていれば、あっという間に体が言うことを効かなくなる。つまり『』を迎えてしまうのだ。一度だけこれを迎えてしまったことがあるが、その時は大変だった。マルクスさんが近くにいなかったら、間違いなく死んでいただろう。

　こうならないギリギリまで戦える時間が、一分三十秒なのである。

　ちなみに、この時間の感覚を掴むのに、俺はまるまる一年もかけてしまった。それでも、その努力が功を奏し、今じゃ俺の中の体内時計は、本気を出せば十分間だけならミリ秒単位で正確に測れる自信がある。一分三十秒くらいなら、ボーっとしていたって全然余裕だ。

　敵の、あの見慣れた黒いロボットが俺の攻撃範囲内に入る直前、俺は走りながらも刀の柄を改めて握り直す。そして、ロボットが攻撃範囲の中に入った瞬間――

「この白い刀身は、お前の魂を、痛みより早く浄土に還す」

　俺がそういった時にはもう、ロボットは真っ二つになっていた。

「毎度毎度、学習しねー奴らだな……まあ、ロボットだから仕方ないか」

　続いて、そのすぐ近くにいたロボットに、右斜め上から斬りかかる。刀のずっしりとした重みを腕全体に感じつつ、俺は振り上げた刀を――この世界にも、あるのかどうかは分からないが――重力の力を借りつつ振り下ろした。そして、驚く程なめらかに斬れた鉄のような塊には目もくれず、後ろに接近していた二体のロボットに、引っ張るような力で持ち上げた『ヘヴンズ・ギア』で真横から右向きに回るように斬りつける。回転斬りだ。ここまでかかった時間は、わずか十八秒。

　今斬ったロボット二体が倒れる中、ここで俺は、残りのロボット達の数を数える。残りは三体か……

　残りは後ろから来るレイ達に任せるとして、俺は『ヘヴンズ・ギア』を地面にそっと置き、後ろで立ち止まって恐らく様子を見ている兵士達の方へと走った。同時に、白刀を抜いた時と同じように『ヘルズ・ギア』を出す。鞘が遠くでカンっという音を立てて落ちるのが聞こえるが、その頃にはもう、俺は兵士の一人が構えていた、全身がスッポリ隠れるサイズの盾に、黒い刀身を思いっきりぶちかます。ベキっという音と共に、盾が割れて、唖然としている兵士の顔が露になった。四十代半ば頃と思われる、禿げたおっさんだ。俺はこいつに見覚えがあった。過去に何度か、戦ったことがあるからだ。視界は赤いが、記憶によれば、こいつらはダークブラウンの、つなぎのような戦闘服を着ている。『ＭＯＣ』という『チーム』のメンバーだ。『ＭＯＣ』の意味は『』である。リーダーは確か、地球では結婚情報業界のトップに君臨している会社の社長だと記憶している。古参の『ＭＯＣ』も例に漏れず連絡手段には困っている『チーム』の一つだが、恐らく全『チーム』の中で一番連絡手段の確保には全身全霊を捧げているのでは無いかと思っている。噂だと『トラース』を我が物にできたら、ゆくゆくは結婚に関する会社を立ち上げるつもりらしい。まぁ、婚活させる……いや、自分達もするのに連絡手段は必須だろうし、無理も無い。事実、うちの『ペア・メタル』の採掘場所の情報をいち早く聞きつけるのは、大抵『ＭＯＣ』だ。

　ちなみに、ロボットなんか使ってはいるものの、結婚産業中心の『ＭＯＣ』なので、別にそっち関連の研究を盛んにしているわけでは無い。あのロボットは、とある『チーム』がばら撒いた量産型のロボットだ。その事を知らなかった俺は、初めてこいつらを見た時、怒りのあまりボコボコにしてしまった。それに関しては非常に申し訳ないことをしてしまったと反省している。

　とはいえ、それはそれ。これはこれ、だ。『ワルキューレ』から連絡手段を奪おうというのなら、ただで済ますつもりはない。

「この黒い刀身は、お前らの肉体を、痛みという名の冥府に堕とす」

　そう呟いた俺は、一旦彼等と距離をとって、刀を真正面に構え直した。『ヘヴンズ・ギア』よりかなり重いので、正直持っているのがやっとだ。『ヘルズ・ギア』は『ヘヴンズ・ギア』とは違って、刃先が四角くなっていて、刀というよりは、どちらかというと棒に近い。大勢の兵士が俺を囲む中、俺は刀の先を地面すれすれまで下ろし、刀を引きずるような感じで思いっきり前へと突っ込む。突っ込んだ先は、さっき盾を壊した奴だ。他の兵士の後ろに隠れようとするが、その前に俺が自分の攻撃のリーチの中に彼を入れるほうが早い。俺は思いっきり、相手の右横腹に黒刀の刃をぶつける。ぐぇ、という、何とも痛そうな声をあげて、そいつは吹っ飛ばされた。地面に叩きつけられたあと、二、三回コロコロと地面を転がり、そのままピクリとも動かなくなる。

　別に死んではいない。『ヘルズ・ギア』では、人や物を斬ることが出来ないからだ。まぁ、その代わりに、物凄く固くて重いけど。使っている感覚から見ると、刀というよりは、むしろ鈍器に近い。

　まだまだ分からないことがあるものの、二年以上も『ヘヴンズ・ギア』と『ヘルズ・ギア』を使っているので、その特性は大体分かっているつもりだ。

　白い刀の『ヘヴンズ・ギア』は、とにかくよく斬れる。こいつで斬れない固体を、俺は知らない。

　黒い刀の『ヘルズ・ギア』は、とにかく重くて硬い。こいつを傷つけられる物を、俺は知らない。

　こう言ってみると、なんとも矛盾したことを言っているようだが、実はそんなことは無い。この二本の刀は、互いに強く反発する性質を持っているので、鞘に収まっていない状態では、そもそも近づけることすら出来ないからだ。

　手に重くのしかかってくる『ヘルズ・ギア』を、俺はハンマー投げと似たような要領で振り回す。『ヘヴンズ・ギア』よりさらに重いので、回転斬りをするのも一苦労だ。ただ、この刀は『斬れない』という特性があるので、扱いに関しては『ヘヴンズ・ギア』より幾分、気を使わなくて済む。

　ちなみに、あの時お姉様はロボットの腕を吹っ飛ばしていたが、あれは腕を『斬った』のでは無い。『へし折った』のである。俺はまだその領域には達せていない。事実、あのロボット相手では、まだ俺は『ヘヴンズ・ギア』を使わなければ絶対に勝てない。なんともまぁ、改めてお姉様の実力には舌を巻かされるというものだ。

　そんな事を考えている内に、ここら辺の『ＭＯＣ』の兵士どもの数は半分位まで減っていた。残り時間、後五十秒。今や兵士達は、刃渡り三十センチ程の短剣と盾を手に、俺を威嚇するように囲んでいるが、彼等が自身の攻撃の範囲内に俺を入れる前に、俺がバッタバッタとなぎ倒す。

　後ろから突っ込んでくる敵に、俺は右斜め上から斬りつける。そして、相手の肩に刀身が当たった時の、僅かな反動を利用して、俺は背後から忍び寄っていたもう一人の兵士に、今度は左斜め上から斬りつけた。バキッという嫌な音が聞こえるのも気にせず、俺は倒れた兵士を飛び越えて、刃先は地面すれすれの位置に保ったまま、唖然としている別の兵士に向かっていく。

「ざぁああいっ！」

　気合を込めて、俺は盾を構え直した兵士を、盾の上から水平に斬りつける。ガンっという音と共に蹌踉めく兵士に、回転して反対方向から水平に刀身をぶち込んで止めを刺す。声もなく倒れる兵士。俺は残りの相手を探すために後ろを振り返ると、そこには息を切らしたレイがいた。どうやら、後ろのロボット達は、全部片付けたらしい。

「ま……全く、ロラン！　あんたって奴は、毎度毎度一人で突っ走っていくんだから……！」

「……そりゃ、今更ってもんだね。ほら、後ろから来るぞ！」

「ええっ？」

　慌てて振り返るレイだったが、既に兵士数人が、俺達の攻撃範囲より内側に入ってきていた。俺達の武器は長すぎるので、あまり敵に接近されると、戦いづらくて仕様がないのである。

　してやったりといった顔のおっさん二人だったが、不意に足元に向けて放たれた矢の衝撃で、軽く前につんのめる。この矢は、樹葉の使う弓から放たれた矢だ。矢の先っぽには、空気がギンギンにつまった、五百円玉サイズの小さな風船が取り付けられており、標的に当たると、傷つけない代わりに強烈な爆風が相手を襲う。

「おっ、サンキュー樹葉ちゃん！」

　レイはそう言うと、斧槍の、刃物がくっついていない棒だけのところで、向かって右側にいたおっさんの顔を殴る。殴られたおっさんは、顔から地面に倒れ込んだ。ちなみに、もう片方は、俺が思いっきり斬り上げたので、既に仰向けに倒れて動かなくなっている。

「うぉおっりゃっ！」

　そして、そんな声と共に、斧槍の斧の部分で、自分が倒した奴の――体の近くの地面を思いっきり叩いた。

「さぁ、まだやる気っ？」

　強気に笑うレイに、思わずたじろぐおっさんは、腹ばいでその場から離れる。

「ぜ、全員、撤退！」

　そして上ずった声でそう叫ぶやいなや、自分はとっとと、倒れた兵士を置き去りにしたまま逃げていった。他のやつも、慌ててそいつの後を追う。逃げた先は、恐らく自分達の『ダウンロード・メタル』のある場所であろう。

「……任務完了」

　俺は、そう呟いて、途中で置いてきた自分の刀とその鞘を取りに行った。